

# 28amG-008

薬学教育における学習意欲とコミュニケーション能力の醸成のためのPBL型実習の実施とその評価

○安田 高明<sup>1</sup>, 飯塚 晃<sup>1</sup>, 谷古宇 秀<sup>1</sup>, 稲瀬 實<sup>1</sup>, 今村 順茂<sup>1</sup>, 秋田 弘幸<sup>1</sup>,  
長岡 正男<sup>1</sup>, 船山 信次<sup>1</sup>, 川久保 弘<sup>1</sup>, 秋山 由紀雄<sup>1</sup>, 三澤 美和<sup>1</sup>, 岩瀬 晴信<sup>1</sup>  
(<sup>1</sup>日本薬大)

【目的】日本薬科大学では、自己表現能力・問題解決能力の醸成のための教育の一環として、2年次にPBL実習を実施している。今回、各実習形式の内容とその有効性について評価を行った。【方法】1 グループを10～12名で各実習を行った。

【結果】1) 文献検索・発表形式：4項目に関して自己評価をした結果、4段階評価において3.1～3.5ポイントであった。2) ワークショップ形式：4段階評価において自己評価は2.5～3.4ポイントであった。3) 構造解析形式：4段階評価において2.3～2.8ポイントであった。【考察】以上3形式による実習中、構造解析形式が最も自己評価が低いことから、構造解析を苦手とする学生が多いことがわかった。また、文献検索形式とワークショップ形式に関しては、ほぼ全員が満足した評価を示しており、学習意欲とコミュニケーション能力の醸成に有効な方法であることが示唆された。